

【 論文 】

井上円了著作の中国語訳及び近代中国の思想啓蒙に対する影響

李立業

はじめに

1840 年のアヘン戦争は中国の門戸を外国に開き、中国の知識人の考えを変える契機となった。林則徐、魏源らは国力の衰微を痛感し、西洋文明を学ぶ必要性を認識した。魏源は『海国図志』を著して欧米諸国の事情を紹介し、「夷の長所を以て夷を制す」と主張し、西洋の書物を翻訳し、西洋を勉強する必要性を述べた。1860 年代にアロー戦争を経て、清朝の一部の官僚が目覚め、彼らは「中体西用」のスローガンを掲げ、軍事工業の建設、新式学校と翻訳機関の設立などを通じて、西洋の機械文明を学ぶ「洋務運動」を始めた。1895 年の日清戦争での敗北は、中国の知識人に西洋の機械を学ぶだけでは中国の運命を変えられず、根本的に社会制度を変革しなければならないと認識させた。彼らは視線を明治維新後の日本に移し、日本を介して西洋を学ぶ方式を確立した。日清戦争後、中国は大量に日本書を翻訳して「西学」の導入に努めた。統計的にみると、1896 年から 1911 年までに中国が翻訳した日本書の数は 958 冊で¹、同期に翻訳された西洋の書物の数を大幅に超え、翻訳の重点も社会制度や思想文化、特に諸学の基礎と思われる哲学に関する書物に置かれた。井上円了の著述は正にこの時期に中国に翻訳して紹介されたのである。

1. 井上円了著作の中国語訳

井上円了（1858 -1919 年）は明治から大正の時代にかけて活躍した哲学者、教育者である。円了は仏教の復興に努め、仏教が「護国」と「愛理」の統一した宗教である²と考へて、「護国愛理」のスローガンを唱へた。仏教を国の運命と結びつけて、仏教の隆替と国家の盛衰には関わりがあり、仏教が護国や民衆の教化などの社会的責任を積極的に負うべきだと主張している。キリスト教や欧化主義的風潮に対して、一連の仏教や哲学についての著述をし、西洋哲学と仏教哲学を結びつけ、キリスト教を批判して仏教を顕彰している。哲学によって宗教家と教育者を育成するため、1887年に「哲学館」（後の東洋大学）を創立した。

円了は哲学者であるが、近代的な妖怪研究の創始者としても知られ、彼はそれぞれの妖怪について深く考察し、妖怪を「真怪」、「仮怪」、「誤怪」、「偽怪」の四つに分類している。円了の妖怪学研究は、「仮怪を払い去りて真怪を開き示す」ことを目的とし、「真怪そのものは宗教のいわゆる無限、絶対、不可思議の体に外ならざればなり」（16：186）というように、「真怪」が「絶対無限、不可思議」なる宗教世界の实体であり、その妖怪学研究の目的は宗教世界の真相を開頭することでもあると考えられている。

井上円了著作の中国語訳は、1889年の林廷玉による『欧美各国政教日記』がその始まりとなった。日清戦争前に、中国ではもう日本書を訳し始めていたが、その種類と数は少なかった。日清戦争後、翻訳された日本書の種類も数も急増し、1896年から1911年までに中国が訳した日本書は958冊に達し、哲学、宗教、自然科学、社会科学、応用科学、歴史、地理など、幅広い分野に及んだ³。この時期に中国語に翻訳された著作が最も多い日本の思想家は円了であり、譚汝謙が編輯した『中国訳日本書総合目録』には12種の円了著作の中国語訳が記載されている。それを整理してまとめたものが表1である。

表1 『中国訳日本書総合目録』に記載されている井上円了の中国語訳⁴

書名	訳者	出版機関	出版年
欧美各国政教日記	林廷玉	新民訳印書局	1889年
哲学要領	羅伯雅	広智書局	1902年

哲学原理	王学来	東京閩学会	1903年
哲学微言	川尻宝岑	東京游学社	1903年
(統哲学) 妖怪百談	徐渭臣	文明書局	1903年
印度哲学綱要	汪歙	普益書局	1903年
妖怪学講義録総論	蔡元培	商務印書館	1906年
妖怪百談	何琪	商務印書館	1911年以前
欧美政教紀原	林廷玉	新民訳印書局	1911年以前
星球旅(遊)行記	戴蕢	彪蒙訳書局	1911年以前
心理療法	盧謙	医学書局	1911年以前
記憶術	梁有庚	不詳	1911年以前

表1からわかるように、譚氏がその著書で記載している円了の中国語訳は不完全なもので、一部の訳書の出版年は不正確であり、また、各訳書の館蔵状況についても紹介していない。中国、日本、ひいては世界中の井上円了を研究する学者たちが、円了著作の中国語訳について研究を行うための参考文献として、現状ではまだ譚氏のこの著書しかない。これでは近代中国における円了の影響を正確かつ深く理解することができず、譚氏の研究成果に修正を加える必要があると思われる。そこで、筆者は代表的な図書館で調査を行い、その調査結果を表2に示した。

表2 井上円了著作の中国語訳の状況

書名	訳者	出版機関	出版年	館蔵状況	借覧の可否
欧美各国政教日記	林廷玉	新民訳印書局	1889年	なし	—
夢説	—	—	1898年	上海図書館	可
哲学総論	蔡元培	—	1901年	—	—
哲学要領	羅伯雅	広智書局	1902年	中国国家図書館 浙江図書館 広東省立中山図書館	可
妖怪百談	何琪	上海新中国図書館	1902年	南京図書館	可

哲学原理	王学来	東京閩学会	1903年	中国国家図書館 浙江図書館 上海図書館	可
哲学微言	川尻宝岑	東京游学社	1903年	なし	—
哲学妖怪百談 続哲学妖怪百談	徐渭臣	文明書局	1903年	中国国家図書館 浙江図書館 南京図書館	可
印度哲学綱要	汪欽	普益書局	1903年	浙江図書館	可
欧美政教紀原	林廷玉	新民訳印書局	1903年	浙江図書館 南京図書館 上海図書館 広東省立中山図書館	可
心理摘要	沈誦清	広智書局	1903年	首都図書館 浙江図書館	可
星球旅(遊)行記	戴賛	彪蒙訳書局	1903年	なし	—
妖怪学講義	蔡元培	紹興印書局	1904年	温州市図書館	可
倫理学	陳榮昌	不詳	1905年	なし	—
妖怪学講義録総論	蔡元培	商務印書館	1906年	中国国家図書館 首都図書館 浙江図書館 上海図書館 中国社会科学院図書館	可
記憶術	梁有庚	明記なし	明記なし	浙江図書館	可
心理療法	盧謙	医学書局	1917年	上海図書館	可
失念術	董祝鼈	商務印書館	1923年	中国国家図書館	可

注1 「夢説」は円了の演説稿で、1898年第15期の訳書公会報に掲載されている。

注2 『欧美政教紀原』は『欧美各国政教日記』の新版と考えられる。

注3 「哲学総論」は最初に『普通学報』の第1・2期で発表された。

注4 「失念術」は『催眠術と心霊現象』（商務印書館、1923年）に掲載されている。

以上の借覧できる訳書を原本と照合し、訳本が原本と一致しているか否かを調べ

た。その結果、以下のようなことが判明した。原本が見つからない『哲学原理』を除き、『哲学要領』と『妖怪学講義録総論』の訳本は原本と一致していた。『心理摘要』は1887年に哲学書院が発行した原本に基づき、訳者が序言、索引と試験問題の部分を省略して、目次と本文の部分を翻訳していた。『歐美政教紀原』は目次では原本の第二が第十五となり、第二百二十五と第二百二十六の順序が逆となり、また本文では訳者の考えが加わっていた。『印度哲学綱要』は、目次については原本と一致しているが、本文では省略しているところがあり、また原本の序言、付録の部分が省略され、これに代って訳者序が添えられていた。『心理療法』も原本の緒言が省略され、本文では省略しているところがあった。何琪の『妖怪百談』と徐渭臣の『哲学妖怪百談』、『続哲学妖怪百談』はともに円了の『妖怪百談』から訳したものであるが、何氏訳本の方がより原本に即していて、徐氏訳本は本文ではほぼ原本と一致しているが、一部の目次が原本と違っていた。例えば、『哲学妖怪百談』の第五談「幻聴」（山間の呼声）、第三十六談「物誤」（幽霊の誤覚）、第六十八談「火玉」（下谷の怪談）など⁵、『続哲学妖怪百談』の第四談「魚神」（海鱷の頭も信心から）、第五談「衣鬼」（幽霊を切る）、第十四談「運命説」（運と非運）など⁶である。「失念術」は円了の『失念術講義』の第五・六章から抄訳され、内容も肝要だけを選んで訳し、厳格には原本に基づいていなかった。「哲学総論」も『仏教活論：顕正活論』の第二段から肝要を選んで訳されたものである。

2. 近代中国の思想啓蒙に対する影響

(1) 康有為

康有為（1858-1927年）は清末民初にかけての思想家、政治家であり、「戊戌変法」の担い手である。幼児から儒学の正統な教育を受けていたが、1879年に香港を遊覧し、欧米の文明や思想に触れ、これは彼が中学から西学へ転向する始まりとなった。次いで上海に出て、さらに欧米諸国の訳書を渉猟し、西洋文明の先進性に感心して政治改革の緊急性を認識した。1888年から1898年まで、相次いで七回光緒帝に変法を行うよう上奏を行い、1898年6月、ついに光緒帝が康氏の変法主張を取り入れ、幅広い分野で改革を行った。ところが改革は西太后を頂点とする保守派の反発に遭い、僅か百日あまりで西太后のクーデターにあって失敗に終わり、康氏は

日本に亡命した。

康有為は1897年に編んだ『日本書目志』の中で、『哲学要領』、『哲学一夕話』、『仏教活論』、『倫理通論』など多くの円了の著書を紹介した人物であるが、両者が実際に面談したのは1902年のことである。『南海康先生年譜続編』によれば、康氏は香港とシンガポール経由で1901年に印度へ向かい、10月に到着してダーズリンに泊まり、1903年4月に印度を離れた⁷。また、円了は『西航日録』によれば、明治35年(1902年)11月に西航の途に就き、12月19日ダーズリンに到着して、翌日に康有為を訪い、円了は詩を一首作って康有為に示し、康氏もその詩に和したことを記載している。康有為の「須弥雪亭詩集」に次のように記載している⁸。

日本井上円了博士、哲学第一名家也。訪余于金剛宝土、留之下榻、贈詩索和。万死奔亡救国危，余生身世入須弥，偶从空谷聞鸞嘯，了尽人天更不疑⁹。

(日本の井上円了博士は第一の哲学名家であり、余を金剛宝土に訪い、詩を贈って唱和を求めた。死を覚悟の上で奔亡して国家の危難を救おうとし、わが経験した一生のことを以て妙高の地に入ろうとする。まれに空谷に鸞鳥の嘯くを聞かん。人事と天命とを尽くしてさらに疑わず。)

また、康有為は四聖堂に画賛を作った。

日本哲学博士井上円了来館談玄甚歎，索題四聖堂

以孔子、佛索、格低、康德為四聖。

東西南北，地互為中。時各有宜，春夏秋冬。軌道之行雖異，本源之証則同先後聖之撥異，千万里之心通。藐茲一堂，捧經質从。羹牆如見，夢寐相逢。化星方寸，与天穹窿。億劫旦暮，以俟来者之折衷¹⁰。

(日本の哲学博士井上円了が訪れて歎談し、四聖堂の画賛を求めた。

孔子、釈迦、ソクラテス、カントを四聖とする。

東西南北のいかなる所もそれぞれ中核の地ともなり、四季はそれぞれ誠にほどよく春夏秋冬とめぐる。万物の運行する姿は異なっているけれども、本源にある真実は同じである。古や後世の聖人が治める道は異なっているけれども、千万里も遠く離れた心も通じ合う。美しくしげる一堂、経典を捧げて質問を持って従う。仰ぎみて慕うことまみえるごとく、夢のなかでもあいめぐり会うごとし。もろもろの事象は方

寸のうちであり、天とともに高くゆみなりに曲がる。無限の時はまさに朝晩のごとく、未来におけるほどよく調整された、中を得た世界を待ちたい。)

円了の『西航日録』にも漢字での記載があり、文字上の異同はあるが、この記載によって、円了が印度のダージリンで康有為と会見し、互いに詩を贈り、両者は旧知のように意気投合していることが確認できた。

(2) 梁啓超

梁啓超(1873-1929年)は、字卓如、号任公、中国の近代史における啓蒙的思想家、政治家であり、「戊戌変法」の担い手の一人である。幼児から自宅にて伝統教育を受け、15歳の時に広東屈指の書院であった学海堂で学んだ。1890年に科挙試験の帰途の上海で『瀛寰志略』を手にし、江南製造局が訳した外国書にも接触して、欧米諸国の高い文明を認識して世界について開眼していった。次いで康有為と出会って、その学識に感服し、万木草堂に入って康氏に師事し、康の説を奉じてその片腕として変法維新を推進していた。1898年、戊戌政変によって変法運動が失敗したため、梁啓超は日本に亡命した。

康有為の『日本変政記』、『日本書目志』と当時の中国に紹介された日本の書物によって、梁は日本亡命の前に既に日本の事情を了解し、明治維新によって近代化した日本に憧れていたため、日本を介して西洋を学ぶことを唱えていた。梁は「夏威夷遊記」で「日本に居住して以来、広く日本書を搜して読んで、(中略)頭がそのために変わり、思想言論はまるで別人のようになった」¹¹と述べているように、日本に亡命した後、特に日本語を習得し、大量の日本書を読んで、思想がそのために一変したのである。また、梁は積極的に日本が受容した西洋の近代文化を中国に紹介し、「東籍月旦」、「和文漢読法」などを著し、日本での西洋の翻訳書や日本人が書いた西学に関する著作を学ぶことを勧めている。「東籍月旦」で、梁は円了の『倫理通論』について次のように述べている。

この書は明治20年に発行され、今を去る15年前のことである。日本人にとって既に芻狗のような取るに足りないものであると思うが、我が国の今の需要に適合する。全部で九篇あり：第一篇緒論、二十三章あり、第二篇人生目的を論じ、十

七章あり、第三篇善悪標準を論じ、十八章あり、第四篇道德本心を論じ、十八章あり、第五、第六篇行為進化を論じ、合わせて三十一章あり、第七、第八篇各家異説を箇条書きにし、合わせて三十六章あり、第九篇諸説分類、十三章あり、末に倫理学者年代考が添えられている。この書は倫理学に関する各問題の分類における元良氏の著書と体例が違い、諸家の学説や流派の形成及びそれぞれの変化過程を簡潔かつ明瞭に記述し、今後の新道德の考定のためによい参考になる¹²。

梁が推薦の理由のみならず、章節の見出しを詳しく並べて具体的な内容を読者に知らせ、またその他の著書と比べてその違いと長所を指摘していることから、梁は円了の『倫理通論』を詳しく読み、かつ内容をよく理解していることが確認できた。

梁啓超は円了の著書を読んだだけでなく、直接円了との接触もあると見られる。「近世第一大哲康德之学説」は、円了が創立した哲学館を見学してヒントを得て、書き上げた文章である。梁は文章の冒頭に次のように述べている。

吾は前に日本の哲学館に四聖祀典なるものを見たことがあり、訝しいと思った。その名を考察すると、一釈迦、二孔子、三ソクラテス、四カントである。その比較対照が正確か否か、吾はあえて言わないが、正確ではないとしても、数千年の学界におけるカントの位置も想像できるだろう。従ってカントの説を論じる¹³。

梁啓超が哲学館を見学したのはいつのことなのか、今は明確にできないが、推定によれば1899年であり、同年の5月13日に梁は東京大学教授の姉崎正治に推薦され、哲学会大会で「論支那宗教改革」と題する講演をした。円了も大会に出席したので、このために円了と知り合いになり、誘われて哲学館を見学してから、カントの思想史上における重要性を認識したのだろう。文中で梁は仏教思想をもってカントの学説を解釈し、カントの認識論を仏学と比較して、カントの哲学が仏学によく似ていると考察している。このような観点は明らかに円了の仏教思想から影響を受けたのだろう。また、梁の「論仏教与群治之関係」、「与友人論保教書」、「仏教心理学浅測」などの仏学に関する文章も、当時の円了をはじめとする日本仏教界の影響を受けたと思われる。

(3) 『浙江潮』

『浙江潮』は、1903年に中国人在日留学生の浙江同郷会によって東京で創刊された月刊誌であり、合わせて12期が刊行され、每期60頁余りである。孫翼中、蔣方震、馬君武、蔣智由などが編輯し、社説・論説・学説・大勢・記事・雑録・時評・談叢などの欄を設け、「輸入文明」「発其雄心」「養其気魄」「洵湧革命潮」を宗旨とした。中国に対する帝国主義の侵略を暴露して、改良派の「平和立憲」主張を批判、民主革命を宣伝し、欧米の社会政治学説を積極的に紹介している。『浙江潮』は、20世紀初における在日留学生が創刊した影響力のある刊行物であり、過渡期における中国の波瀾に富む社会事情を客観的に反映し、その時代の社会思潮の変化、発展の過程を現している。

『浙江潮』の雑録欄に東報時論があり、主に日本の各新聞と雑誌から肝要な記事を選んで、紙幅を縮減して発行し、直接日本の新聞や雑誌が読めない国民に読ませて、国民の智識を増進しようとしている。『浙江潮』第2期の東報時論に、円了の「東洋倫理と西洋倫理との違い」という文章の要点を総括して、

東洋: (一) 縦の人倫、父母を人倫の初めとする。

(二) 家族を社会の単位とし、人は家によって立ち、故に家族の組織である。

(三) 家督相続、嗣子がなければ養子をとる。

(四) 歴史から言えば東洋諸国は一家の発達であり、故に家族を重んずる。

(五) 儒教は孝道を人倫の本とし、故に縦の人倫を維持する。

西洋: (一) 横の人倫、夫婦を人倫の初めとする。

(二) 個人を社会の単位とし、家は人によって立ち、故に個人の組織である。

(三) 養子の制度はなく、家督は相続しない。

(四) 西洋諸国は個人の結集に過ぎない。

(五) キリスト教は人を愛することを人倫の本とし、故に横の人倫を維持する¹⁴。

と掲載している。以上述べたように、円了の著述は当時の在日留学生にも影響を与え、かつ彼らが創刊した刊行物によって中国国内に紹介され、国民が日本及び西洋の事

情を了解することに重要な役割を果たした。

(四) 光緒帝

オーストラリアの学者である葉暁青氏は、ある時中国第一歴史档案馆で資料を調べ、たまたま光緒帝が朱筆を加えた文献リストを見つけた。この文献リストの時期は1908年(光緒33年)1月29日であり、その中に円了の『歐美政教紀原』がある。他には『政治講義』、『政治学』、『国法学』、『法学通論』、『日本憲法説明書』、『日本憲政略論』、『憲法論』、『英国憲法論』、『日本警察講義録』、『日本監獄法詳解』、『比較国法学』、『国債論』、『万国国力比較』、『列国政治異同考』、『欧州新政史』、『欧州財政史』、『経済通論』、『日本法制要旨』、『日露戦紀』、『最新戦法学』、『德国学校制度』、『万国輿図』¹⁵など、西洋及び日本の政治、経済、法律、教育、軍事などの分野に関する書物もある。

光緒帝(1871-1908年)は、1898年に康有為の変法主張を受け入れて戊戌変法を断行したが、その改革は西太后ら保守派の反発に遭い、西太后のクーデターによって挫折し、光緒帝は中南海に幽閉されてしまった。しかしながら、上述の文献リストから分かるように、幽閉されて執政権を失った光緒帝は依然として西学の書物を愛読し、絶えず西洋の社会政治制度を学んでいた。彼は来たる日に再び政権を握って改革を行い、日本が明治維新によって強大となったように、中国も独立富強の道に向かって進むことを期待していたのだろう。

(五) 蔡元培

蔡元培(1868-1940年)は、中国近代の民主革命家、教育家であり、中華民国初代教育総長、北京大学学長、中央研究院院長を歴任し、近代の教育制度の改革と民衆の啓蒙教育に力を入れた。日本語は欧米文化を理解するための橋渡しと考え、独学で日本語を習得した。蔡は大量に日本書を読んで、また翻訳を通じて、その知識を国民に紹介していた。その中で円了の著述にも触れている。「日本哲學家井上氏の書を読んで初めて悟った。井上氏曰く：仏教は真理であり、故に護国なるものである。又曰く：仏教は理学・哲学にもとづいた宗教である」¹⁶と述べているように、蔡が1900年に発表した「仏教護国論」の中で仏教によって国を鎮護することを呼びかけていること

は、明らかに円了の影響を受けた痕跡であろう。また 1901 年に発表した「哲学総論」も、円了の『仏教活論：顕正活論』を抄訳して書き上げたものである。

蔡元培の日記によれば、蔡は 1901 年に他人に頼んで『妖怪学講義』を購入し、数年かけて六冊を訳出して亜泉学館によって出版するつもりだったが、あいにく学館の火事で五冊分の原稿は焼失してしまい、ただ「総論」の部分が残った¹⁷。1904 年に紹興印書局は『妖怪学講義』と題してその「総論」部分を出版し、1906 年 4 月に創刊した『雁来紅叢報』も「総論」を連載し、1906 年 9 月に商務印書館によって版權を買って『妖怪学講義録総論』と題して発行した。蔡が訳した『妖怪学講義録総論』は、円了著作の中国語訳の中で影響力が一番大きく、近代中国社会に影響を与えた 100 種の代表的訳書の一つとして選出されている。この書は出版されてから何度も重版され、中国の大陸だけでなく、香港、台湾などの地域でも発行された。表 3 は筆者が今見られる蔡訳『妖怪学講義』をまとめたものである。

表 3 蔡訳『妖怪学講義』のまとめ

書名	出版機関	出版年
妖怪学講義	紹興印書局	1904 年
妖怪学講義録総論	上海商務印書館	1906 年
妖怪学講義	臺北東方文化書局	1974 年
妖怪学	台湾渤海堂文化会社	1989 年
妖怪学	上海文芸出版社	1992 年
妖怪学講義録総論	北京東方出版社	2014 年
妖怪学講義録総論	香港中和出版会社	2015 年
妖怪学講義録総論	中州古籍出版社	2016 年

注：商務印書館は 1906 年に初版を発行し、1922 年まで合わせて 8 版を重ねた。

『妖怪学講義』は総論、理学、医学、純正哲学、心理学、宗教学、教育学、雑部の 8 つの部門を設け、主に物理、化学、天文、地理、生物などの科学知識をもって、それぞれの妖怪について考察している。円了は妖怪を虚怪と実怪に、虚怪はさらに偽怪

と誤怪に、実怪はさらに真怪と仮怪にそれぞれ分けて、迷信を打破して真怪を開き示すため、科学的な分析を以て数百種の自然界の異常現象、幻覚、妄想や誤った判断による迷妄、感情や意志の衝動によって起こる精神的異常をそれぞれに分析していた。迷信は、人々の自然科学に対する認識不足のもとに生じ、数千年の発展によって人の思想の根底に浸透し、社会発展の障害となっていた。これらの迷信を打破しようとするなら、科学と哲学の知識によって正しい認識をもつ他に方法はない。蔡元培がこの書を翻訳する目的は、まさに迷信を打破して、教育を振興し、社会道徳の構築を推進することにあつたと見られる。彼は迷信を否定し、健全な道徳を構築するために、健全な知識がなければならないと考え、「国家のために妖雲妄霧を払拭しようとするなら、必ず智徳の二光を開き」、必ず「人心の迷妄を払」うべきである¹⁸と主張して、科学知識の普及を目指していた。

蔡訳『妖怪学講義録総論』が出版されると、中国の学界で強烈な反響を引き起こした。中国近代の出版者の杜亜泉は「初印総論序」で「この書は甚だしく其の国の人に重んじられ、甚だしく其の国の民俗に利し」、「煌煌たる巨冊にして、その精思名論に余が感服して崇拜し、名状すべからず」、「余がこの書を読めば、学問上の智識が増し、心理学及び生物学の基本を略知し、宇宙間の名理を自覚し、(中略)井上氏の書を読んでその生物進化、精神、物理諸論に触れれば、余心が幽なり渺なり、その真怪に接触し、(中略)人世の苦勞を思わぬ」¹⁹と述べている。中国近代の哲学者張東蓀は、1935年までに中国が受容した西洋哲学の歴史を三つの時代に分けているが、蔡訳『妖怪学講義録総論』は第一時代の象徴であり、中国が受容した西洋哲学の早期の代表作として、「其の時代の中国人の哲学に対する態度を反映している」²⁰と考えている。また、研究者の江紹原は、その『中国禮俗迷信』において、この書を何度も引用して迷信問題を分析し、日本が明治時代に近代化国家を建設するために、民衆の迷信を打破した代表作であると評価している²¹。

3. 終わりに

井上円了は生涯を通じて著述と教育事業に力を注いだ。哲学の普及と大衆の啓蒙に身を投じ、その生涯の著述数は著書が127冊、論文等が638編に達していた²²。円了は日本社会に大きな足跡を残しただけでなく、近代中国にも重要な影響を与

えたのである。すでに述べたように、日清戦争後 1896 年から 1911 年までに中国が翻訳した日本書は 958 冊に達し、この時期に中国語に翻訳された著作が最も多い日本の思想家は井上円了であった。従って本稿では、筆者は、円了著作の中国語訳の状況を調べ、当時の中国の知識人と円了との交際を考察しながら、井上円了とその著作が近代中国に対する影響について検討してきた。その結果、円了の著述と思想は当時の中国の知識人に大きな影響を与え、また彼らによって中国に紹介されて、国民智識の増進を促進し、近代中国社会の思想啓蒙において重要な役割を果たしたことが判明した。

当時の中国近代知識人はもともと社会改革と民族自救のために思想上の方法を探っていたのであるが、後の中国の仏学研究者は、円了の仏教は宗教であり、哲学でもあるという説から啓発を受け、仏教が一切の思想を超え、かつそれを含む理論的な根拠を探そうと試みていた。円了をはじめとする日本の仏学家が清末以来の中国思想界に与えた影響によって、中国の知識人は西洋の科学と哲学で仏教の教理を解釈し、仏教の教理をもって西洋の科学と哲学を理解し、また西洋の近代宗教学の研究手法で仏教の歴史、文献や思想などを研究することを試みたのである。これは中国仏教の復興を促進しただけでなく、中国の思想界に新思潮を理解する一つの概念的および論理的な基礎をも提供したと思われる。

参考文献

- 井上円了著、蔡元培訳『妖怪学講義録総論』東方出版社、2014 年
譚汝謙編『中国訳日本書総合目録』香港中文大学出版社、1980 年
王青「蔡元培と井上円了における宗教思想の比較研究」(『国際井上円了研究』1、2013 年)
東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第 6 巻、1999 年
康同璧「南海康先生年譜続編」(楼宇烈編『康南海自編年譜』中華書局、1992 年)
日本東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第 23 巻、2003 年
康有為『万木草堂詩集』、上海人民出版社、1996 年
梁啓超「夏威夷遊記」(『梁啓超全集』第 2 巻、北京出版社、1999 年)
呉松編『飲氷室文集点校』雲南教育出版社、2001 年
梁啓超「近世第一大哲康德之学説」(葛懋春・蔣俊編『梁啓超哲学思想論文選』北京大

学出版社、1984年)

楊志「光緒帝最後の書単」(『時代発現』第7期、2013年)

蔡元培「仏教護国論」(高平叔編『蔡元培全集』第1巻、中華書局、1984年)

王世儒編『蔡元培日記』北京大学出版社、2010年

黄克武「梁啓超と康德」(『台湾中央研究院近代史研究所集刊』第30期、1998年)

左玉河編『中国近代思想家文庫 張東蓀卷』中国人民大学出版社、2015年

江紹原『中国禮俗迷信』渤海湾出版会社、1989年

注

- 1 譚汝謙『中国訳日本書綜合目録』香港中文大学出版社、1980年、p.41を参照。
- 2 王青「蔡元培と井上円了における宗教思想の比較研究」(『国際井上円了研究』1、2013年)、p.120。
- 3 譚汝謙『中国訳日本書綜合目録』香港中文大学出版社、1980年、p.41を参照。
- 4 譚汝謙『中国訳日本書綜合目録』香港中文大学出版社、1980年を参照。
- 5 井上円了『妖怪百談：通俗絵入』四聖堂、1898年を参照。
- 6 井上円了『妖怪百談：通俗絵入続』哲学書院、1900年を参照。
- 7 康同璧「南海康先生年譜統編」(楼宇烈編『康南海自編年譜』中華書局、1992年)を参照。
- 8 井上円了『西航日録』(東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第23巻、2003年)を参照。
- 9 康有為『万木草堂詩集』上海人民出版社、1996年、p.164。
- 10 同上、p.165。
- 11 梁啓超「夏威夷遊記」(『梁啓超全集』第2巻、北京出版社、1999年)、p.1217。
- 12 梁啓超「東籍月旦」(呉松編『飲水室文集点校』雲南教育出版社、2001年)、p.1377。
- 13 梁啓超「近世第一大哲康德之学説」(葛懋春・蔣俊編『梁啓超哲学思想論文選』北京大学出版社、1984年)、p.151。
- 14 「井上円了氏の東洋倫理と西洋倫理との違い」(浙江同郷会『浙江潮』第2期、1903年)、pp.123-124。
- 15 楊志「光緒帝最後の書単」(『時代発現』第7期、2013年)。
- 16 蔡元培「仏教護国論」(高平叔編『蔡元培全集』第1巻、中華書局、1984年)、p.106。
- 17 王世儒編『蔡元培日記』北京大学出版社、2010年、p.170、p.186を参照。
- 18 「出版説明」(井上円了著、蔡元培訳『妖怪学講義録総論』東方出版社、2014年)。
- 19 杜亜泉「初印総論序」(井上円了著、蔡元培訳『妖怪学講義録総論』東方出版社、2014年)、p.1。

²⁰ 張東蓀「文哲月刊發刊詞」（左玉河編『中国近代思想家文庫 張東蓀卷』中国人民大学出版社、2015年）、p.389。

²¹ 江紹原『中国禮俗迷信』渤海湾出版会社、1989年を参照。

²² 三浦節夫「井上円了と著述」（東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第25巻、2004年）、p.761。

（李立業：中国社会科学院大学院哲学学部）